

「神に喜んでいただく生き方」

私達は生活の中で色々な喜びを感じる者です。目標としていたことを達成した時に私達は喜びを感じます。祈っていた祈りがかなえられた時、喜びを感じます。

レストランを営む人は、料理を食べたお客さんが「おいしかった」と喜んでくれた時に、それは自分の喜びとなります。車のセールスをしている人は「自分にぴったりの車を勧めてくれた」とお客さんに言われれば、それはその人の喜びとなります。このように喜びが自分の仕事にもなると、それが私達のやりがいとなります。そして、そのようなやりがいを仕事の中に見出すことができる人は幸いな人だと思います。

あの人の、この人の喜ぶ顔、それが見たくて私達は一生懸命働き、自らを犠牲にすることがあります。そのために、多大な労力を使うとしても、誰かが喜んでくれるのなら、そんな苦労も吹き飛んでしまうのです。

聖書は神様が私達に命を与え、その神様は私達が母の胎内で造られていく様を見守られたと書いています。私達が産声をあげた瞬間、その誕生を喜ぶ父母と同じように、神様は微笑みながら温かく私たちを見守っていました。

神様は私達の誕生を心待ちにされていて下さり、私達に命を与えることを喜びとされたので、私達は母の胎でかたち造られ、この世界に生まれてきたのです。そんな私達はその神の栄光のため、その目的のために、そして、その喜びのために存在しているのです。

そうです、神に喜ばれること、それは私達の人生の目的の一つなのです。そこで今日は具体的にどのように神様に喜んでいただくことができるのかということをお話ししたく願っております。まず最初に神様を礼拝するということについてお話ししましょう。

神を礼拝する

私たちは今日、この礼拝に集ってきています。なんのためでしょうか。会いたい人がいるからでしょうか。美味しい食べ物が用意されているからでしょうか。いいえ、「神様を礼拝するため」に集まってくるのです。

それでは神を礼拝するとはどういうことなのでしょう。私達は時々、心の中で思います。「今日の礼拝では教えられた、励まされた」。それは素晴らしいことです。し

かし、その思いは礼拝について全てを説明するものではありません。なぜなら、私達が教えらえるとか、何かをいただくということが礼拝において一番、大切なことではないからです。

新約聖書の原語であるギリシア語によれば、礼拝はプロスキュネオーと言います。そのうちのプロスとは「ーの方へ」という意味で、キュネオーは「キスする」という意味です。すなわち、礼拝の意味は「ーの方に向かって口づけする」という意味なのです。「口づけする」とは、相手に対して最高の敬意を表すことを意味し、その中には「ひれ伏する」とか「拝む」という意味も含まれています。

すなわち私たちは今「神様に向かい口づけするほどに、私たちの敬意を神に示し、ひれ伏して神を拝む」ためにこの礼拝に来ていると言えます。礼拝は自分を喜ばせるためのものではなくて、私達の存在の原因と理由である神の前にひれ伏して拝するためにあるのです。

ローマ書12章1節-2節において、パウロは言いました「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」。

ここには「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」と書かれています。そう、パウロは「神に喜ばれる」と書きました。礼拝の中心は私達自身を神様に捧げ、それを神様に喜んでいただくということです。そうです、神様は私達の心からの礼拝を喜ばれるお方です。

沖永良部という島にいた頃、その島ではじゃがいもを生産しており、その季節になりますと「これが今年の初ものです」と言って島の人が届けてくれました。私達が何かをいただく時、それが「初もの」であると聞くと、喜びと感謝がさらに大きくなります。

それは初ものが特別おいしいということよりも（確かにそれもあるでしょうが）、自分の畑で獲れた最初のを手にした時に、その方が私達の顔を思い浮かべてくださって、「これはあの人にまず食べてもらおう」と思ってくれた、それが私達は嬉しいのです。私達はその方の心に感謝し、それを心から喜びます。

「礼拝する場所」についてサマリアの女がイエス様に尋ねた時に、イエス様は礼拝する場所よりも、その時の心の在り様について話されました。『23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。24 神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである』(ヨハネ4章23節-24節)

そうです、神様は霊なるお方でありますゆえに、私達も霊とまこととをもって礼拝すべきであり、それこそが父なる神が求めておられることだということです。心からの礼拝を神は何よりも喜んでくださるのです。

創世記でアダムとエバの二人の息子が神様のもとに捧げものを持ってやってきました。その時のことを聖書はこう書き残しています。

『¹ 人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」。² 彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。³ 日がたって、カインは地の産物を持ってきて、主に供え物とした。⁴ アベルもまた、その群れのういごと肥えたものを持ってきた。主はアベルとその供え物とを顧みられた』(創世記4章1節-4節)。

言うまでもなく、これらの地の産物も家畜も神が大地に与えたものです。それらを彼らは神に捧げたのですが、そもそも、それは彼らのものではなく、神のものなのです。その神の所有物を二人はそれぞれの捧げものとして神の前にもってきたのです。「神に捧げるもの」というのは、それが何であれ、すべからず全てこのようなものです。そうです、それは神に与えられているものの一部をお返しするということで、「捧げましたよ！」と胸を張るようなことではないのです。

アベルもカインもそのように神にそれぞれが与えられているものの中から、神に捧げたというのですが、神は弟アベルのものを顧みられたました。

なぜですか？なぜなら、アベルが捧げたものは家畜の中でも肥えたもの、また初子だったからです。しかし、カインの捧げものは、きっと収穫した地の産物の中でもかたちの整わないものであったり、余りもののようなものであったのかもしれませんが。言うまでもなく、神様は捧げられたものを喜んだのではありません。それはそもそも神のものなのですから。神様が喜ばれたのはアベルの真実な心なのです。

これは日本で時々見かけるカレンダーです。こちらはアメリカで一般的に用いられているカレンダーです。違いが分かりますか。このカレンダーでは日曜日は週末なので

す。そう、日曜日はウィークエンドなのです。しかし、私達にとりまして日曜日はその週の初めの日なのです。

この違いは私達が思う以上に大きいのです。私達は週の一番最初の時、それを自分のために使うのではなくて、心をこめてその時を主にお捧げするのです。心身のエネルギーを使い尽くした残り物のような週の終わりを神様に捧げるではありません。過ぎました一週間の恵みを想い、その間も神の許しあって生かされて新しい週を迎えることができたことを主に感謝するのです。そして、これから始まる新しい週も主に期待し、まだ起きていないことを主にお委ねして、週を始めるのです。

週の初めの日の朝、まず第一に何よりも先に、神様の前にひれ伏し、礼拝を捧げる、そのようにして一週間を歩み出すことができ、それを全知全能の神が喜ばれているということ、このように始めた一週間ゆえに、私達の心は整えられ、主の御手の中に安んじて、毎日を過ごすことができるのです。

私達はふと思うことがありますか。この礼拝の時間であの事もこの事もできる。ちょっとお待ちください。全知全能の神が喜ばれ、私達に微笑みかけてくださるということ以上の新しい一週間への備え、果たして、そのようなものはあるのでしょうか。

『まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる』（マタイ6章33節）という御言葉は頭で理解するものではありません、実際にそうしてみても、納得させられるものなのです。二つ目の事です。

キリストに仕えることによって

そして、この礼拝とは日曜日の朝限定のものではないのです。それは生活の一部ではないのです。礼拝はこれから始まる一週間の私達の生活そのものです。

このローマ12章の続きに書いてある通りです。「心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかをわきまえ知るべきである」。そう、私達は常に何が神の御心であるのか、また何が神に喜ばれるのかということを考えなければなりません。

それでは、神に喜ばれるために私達ができることは何なのでしょう。ローマ 14章18節にはこう書かれています「こうしてキリストに仕える者は、神に喜ばれ、かつ人にも受け入れられるのである」ここには私達が神に喜ばれるにはどうしたらいいのかということが明確に書かれています。そうです、私達が日々、神に仕える時に神はそれを喜ばれ、さらにはこのことゆえに私達は人にも受け入れられるというのです。

また、ヨハネによる福音書12章26節にはこうも書かれています。「もし、わたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。もし、わたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう」

私達が神に仕える時に、神はそれを喜んでくださる。さらには、そのような私達を神は重んじてくださるところには書かれています。

私たちがどのような人間になるべきか、その目標となって余りあるお方がいます。その方こそイエス・キリストです。私たちは多くの偉人を知っています。しかし、それらの偉大と呼ばれている人々の多くが自分の生き方に最も影響を与えた人として「イエス・キリスト」の名前を第一に挙げています。

人間が求めるべき理想はキリストの内にあるのです。コロサイ2章9節—10節には、そのことをこのような言葉で記しています「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである」。

キリストの内にこそ、全ての神の徳が宿っているというのです。そして、それはキリストの内に満ち満ちているというのです。神の徳の片鱗が少しあるというのではないのです。その徳がまさしく溢れんばかりに満ちているというのです。

熟練した僕とは、自分の主人が何を考え、こんな時にはどうするのかということを察知していく僕です。神の徳に満ちているイエスは何を感じ、何を思い、こんな時、どうするのだろうということを私たちが知り、そしてそのように私達が生きていくこと、それがイエスに仕えていくということです。

もし私達が主人であるなら、そのような僕を喜び、彼を重んじるように、父なる神様も神に仕える私達を喜び、重んじて下さるのです。主にある皆さん、あの人、この人ではなくて、神に重んじられる、これ以上の光栄と励ましがありませんでしょうか。

さらにはこのように生きようとする時に私達には一つの驚くべき祝福がついてきます。すなわち、その人は「人にも受け入れられる」ということです。

私達が互いに受け入れ合うことは難しい事です。しかし、神様は私達を完全に受容してくださいます。さらには私達がキリストに仕えていく時に、私達は周りの人達によ

って受け入れられていくというのです。そうです、神が重んじる人を人も重んじるようになるというのです。

数週間前に藤巻充という牧師についてお話ししました。家庭内暴力と引きこもりのはしりとなった若い時を過ごした方です。学校にもなじめずに17回も退学した方です。親も教師も学友も大嫌いでした。しかし、イエス・キリストと出会ってから、すなわちイエス様によってそのありのままの自分が受け入れられ、先生ご自身もイエスに仕えて生きていこうと決めてから、先生に起きた顕著な変化は、それまで敵意すら感じていた人達が皆、いい人に思えるようになったというのです。これまで憎悪の対象だった先生や友人が素晴らし人に見えるようになったのです。

そして、その素晴らしい人達が教えてくれることに耳を傾け、それを習得するようになりまし。こうして以後、先生は学問の世界でも大きな貢献をなされますすなわち、それまでは腫れ物に触るかのように取り扱われていた先生を皆が受け入れはじめ、重んじるようになっていったというのです。

キリストに仕えることにより、キリストがそれを喜んでくださることを知る。その人を神は重んじ、ひいては人にも受け入れられていく。この生き方が私達におよぼす影響は声を大にして言っても言い尽くすことはできません。

故にここに私達の人生の秘訣が隠されています。人生とは人間関係なしでは成り立ちません。私たちを力づける、あるいは打ちのめす、その要因となるほとんどのことは人間です。人間こそが私たちの喜びの原因で、人間こそが私たちの悲しみの原因です。この人に受け入れられていく人生、これは何にも変えがたい私たちの収穫ではないでしょうか。

神の満ち満ちた徳を宿しているキリストに仕える僕は、人間にも愛され受け入れられていくのです。

神に立ち返ることによって

聖書の中に明らかに神様が喜んでいと記されている聖書箇所があります。それは、ルカによる福音書15章に集中して3つの譬えによって書かれています。そして、その喜び方ときたら半端ではないのです。もうその顔からは満面の笑みがこぼれ、飛び上がるような喜びがそこには記されているのです。一つ一つのイエスの譬を見てみましょう。

ルカ15章4節—7節

④「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。⑤そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、⑥家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うであろう。⑦よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きい喜びが、天にあるであろう。

ルカ15章8節－10節

⑧また、ある女が銀貨十枚を持っていて、もしその一枚をなくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つけるまでは注意深く捜さないであろうか。⑨そして、見つけたなら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。⑩よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前で喜びがあるであろう」。

三つ目のたとえ話。それは有名な放蕩息子のたとえ話です。

二人の息子がいた。弟が父から将来、譲り受けることになっていた財産を受け取り、遠い国に行き、そこで放蕩に身を持ち崩しました。最後には豚を飼う世話をし、その餌すらも食べたくなくなるほどに彼は落ちてしまいました。しかし、その彼が雇い人の一人としてでもいいから父の元に帰ろうと家に帰ったのです。父は毎日、その弟息子を思い、外を眺めていたのでしょう。その姿を見つけると、走って近寄り、彼を抱きしめました。そして、最上の着物を着せ、彼のために一番美味しい肥えた子牛を引いてきてほふったのです。それを見ていた兄はすねてしまいました。自分は父の元でコツコツと仕えてきたのに、なんでこんな弟のためにここまでするのだ。その兄息子に向かい父は言いました「このあなたの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである」。

この3つの譬えは何を言っているのか。これは私たちが神の元には本来、失われているものであるということ言っているのです。そして、この私たちが神様は探しておられると言っているのです。私たちが神の元に立ち返ることを待ち望んでいるのです。

そして、この3つの譬えに共通していることは、もし、私達が神のもとに立ち返るなら、神は大変に喜ぶと言っているのです。その喜びようは半端じゃないのです。ご自身だけではその喜びを抑えきれずに近所の人達を集めて、一緒に喜ぶという言葉がそ

の喜びの大きさを物語っています。さらに天ではみ使いたちの間でも喜びがあがるといのです。

私たちが神を一番、喜ばせることができるのは、失われている私たちが神の元に立ち返った時です。その時に天においてビッグスマイルがあなたに向けられていることでしょう。

このたとえ話は神の愛を知らずに、神から離れて失われて生きていたものが見出だされたという喜びです。これをもう少し広く解釈するのならば、たとえクリスチャンであっても、神様以上にあのこと、このことに心が奪われ、神から離れているというような人をも考えることができるでしょう。このような者達も我にかえり、神のもとに帰るのなら、神はそれを喜んでくださるのです。

ネヘミヤは「主を喜ぶことはあなたがたの力です」（ネヘミヤ8章10節）と言いました。今日、お話ししてきましたように神様が喜んでいてくださる。、微笑んでいてくださるということを知る時に、私達はその神様を喜びます。そして、その喜びは私達の力となるのです。この喜びは一時的なものではなく、私達の生涯、最後まで続く喜びなのです。

今日は神様が喜ぶ3つのことをお話しました。神が私たちに微笑んでいてくれることを願うなら、私達は神様を第一として、心からの礼拝を神様に捧げるべきです。そして、心からキリストに仕えるべきです。そして、神に私達が立ち返るならば、それはそれは天において大変な喜びの歓声が挙がっているのです。

神様が私達を喜んでくださる、そのことによって私達があずかる恩恵はとてつもないものです。これを逃したらなりません。神が私達を重んじてくださる、これ以上、心強いことがこの世にありますでしょうか。お祈りしましょう。